

〈共同討議Ⅱ 概要報告〉

カントをどう教えるか？——初学者向け哲学講義をデザインする

寺田 俊郎

これまでの共同討議で教育哲学が主題とされたことはあったが、哲学の教授法、特にカント哲学の教授法が主題とされたことはなかったと思われる。カント哲学の教授法を問うということはそれを教授することの意義を問うことでもある。できるだけ多様な教育実践を素材として討議ができるように、恒例より多くの提題者が選任された。それが功を奏して、討議では四つの異なった教育実践に基づいて多角的な検討が加えられた。どの提題も提題者自身の授業実践を具体的に報告することから始められた。

伊藤貴雄会員は「対話的リベラルアーツの試み——『啓蒙とは何か』を教材として」と題して、大学の初年次教育に定位して提題した。オンラインの書き込み機能を活用することによって、大人数の授業ながらまさに「対話的な」教養教育が成立している様子が報告され、対話を活性化する鍵はテーマの設定の仕方にあることが指摘された。

上杉敬子会員は「カントと学ぶ技術者倫理」と題して、技術者教育における倫理教育に定位して提題した。技術者倫理教育から規範倫理学が消える傾向があり、学生がカントのいう「自然弁証法」つまり義務を傾向性に適合させようとする心性に陥っていると指摘され、倫理学の原点に戻ることが必要であることをカント自身の言説を引きながら主張した。

嶋崎太一会員は「高校教育におけるカントから初学者向け哲学講義を考える」と題して、高等学校の公民科教育に定位して考察した。義務論が功利主義と対置され、広い意味でのカント主義的な倫理学として導入されていること、「理性の公的使用」が注目されていることが紹介され、哲学教育の高校教育から大学教育への展開が考察された。

平出喜代恵会員は「専門教育としてカントをどう教えるか——『基礎づけ』演習における試み」と題して、哲学の専門教育に定位して提題した。専門教育への導入に当たる演習授業における課題が、哲学史上のカントの位置づけの無理解と専門用語をそれとして自覚していないことに見定められ、それに対する方策を紹介し、カント哲学の理解の要が「一枚岩ではない自己」、叡知界と感性界に引き裂かれる自己に共感できるか否かにあることを主張した。

これらの提題に基づく以下の論考には、討論も踏まえさらに深められた考察が収められている。